〈巻頭言〉

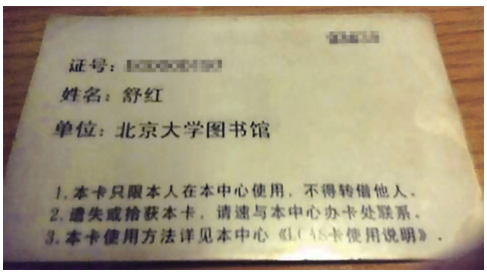
“舒紅”の入館証

研究・国際交流担当副学長　教授　浦山あゆみ（中国語　中国文学）

数年前に北京大学へ研究留学させていただき、興味のある授業を聴講する以外は、図書館へ通って過ごす毎日を送った。北京大の総合図書館は様々な部屋に分かれていて、辞書・洋書・学術雑誌・古籍などの各部屋があり、さらに総合図書館の他に研究室附属の図書室もある。歴史系研究室附属の図書室は専門分野と関連ある書が多く置かれていたのでよく利用した。研究内容によって場所を選んで勉強していたので、全く飽きることなく過ごすことができた。

時には北京大以外の図書館へ資料調査に出掛けることもあった。訪れた回数として最も多かったのは国家図書館で、ここはここで西の方にある総合図書館と、北京市の中心部にある善本古籍館の二箇所に分かれており、両方とも何度か訪れた。

大抵は以上の図書館（ないしは図書室）で事足りたが、他機関へ調査に行かねばならないこともあった。訪れたのは北京師範大学（略して北師大）・中国科学院文献情報中心大楼（略して科学院中心）・人民大学・首都師範大学（略して首師大）の四箇所である。日本の図書館同様、中国でも他機関を訪れるにはまず、自身の所属大学で手続きをする。所定の申込書に記入して北京大の図書館カウンターへ持っていくと、北師大の臨時入館証カードを渡された。裏面には“姓名：舒紅”とあり、“使用は本人限り”などの注意事項が書かれている。「これは“舒紅”という他人になりすまし、北師大へ潜入せよということだろうか…」と、半信半疑でその入館証を持って北師大へ出かけた。図書館の入り口はこれまた本学同様入館証をゲートにかざして入るシステムである。ドキドキしながら“舒紅”の入館証をピッとかざしたが、全く反応がない。何度試しても駄目で、近くにいた係員から身分証の提示を求められた。結局、北京大の身分証とパスポートを見せ、一時利用登録をして漸く入ることができた。つまり“舒紅”の入館証は全く役に立たなかったのである。それでも希望する古籍は閲覧できたし、必要な部分も撮影できたので満足した。翌日、北京大へ“舒紅”の入館証を返しに行った際に「これは使い物になりませんでした」と話したが、職員に怪訝な眼で見られただけだった。



中国科学院文献情報中心の入館証の裏面
「1. 使用は本人限り、他人に又貸ししてはいけません」とある。

それから何ヶ月か経って、今度は科学院中心へ調査に行かねばならなくなった。また北京大の図書館カウンターへ行って手続きすると、今度は科学院中心の入館証カードが渡された。裏面にはやはり“姓名：舒紅”“使用

は本人限り”と同じ文言が書いてある。嫌な予感がしたが、また別の機関だから…と自身に言い聞かせ、科学院中心を訪れた。結果は同じで、役に立ったのはまたもや北京大の身分証とパスポートであった。古いモノクロフィルムを閲覧できた。翌日また“舒紅”の入館証を返しに行き、「前回も今回もこれでは入館できませんでした」と訴えたが、職員は受け取るとすぐに忙しそうに奥へ引っ込んでしまった。

さらに月日が経ち、今度は人民大学へ調査に行くことになった。手続きするかどうか迷ったが、三度目の正直という諺もある、と自分を奮い立たせた。北京大の図書館カウンターへ行くと、人民大のカードが渡された。やはり“姓名：舒紅”とあり、これまで同様の注意事項が書いてある。しかも今回は証明写真までついていて、見知らぬ女性が微笑んでいる。「ありえない」と絶望した。案の定、人民大でも北京大の身分証とパスポートが頼りであった。コピーや撮影は禁止だったが、存分に古籍を閲覧できた。翌日、北京大でカードを返しながら「これは何のためのものですか」と尋ねたら、「提携図書館の資料を利用するためです」と至極当然の答えが冷ややかな一瞥とともに返ってきた。もう手続しない…そう固く誓った。

次は首師大の図書館へ行くことになった。

中国人民大学図書館の入館証

念の為、首師大の図書館員に直接メールを出して閲覧の申込方法を尋ねてみた。すると「身分証と紹介状を持ってきてください」と言う。あの“舒紅”の入館証は紹介状の役割があったのだろうか。再び半信半疑になりつつ、その一方で今度はどんな“舒紅”の入館証だろうと少し期待しながら、北京大図書館のカウンターへ行った。ところが首師大は提携校ではないからカードはない、と言う。そんなパターンも有るのかと驚き、すぐに所属の中文系事務室へ行って紹介状を所望した。すると、中文系には図書室がないので歴史系図書室へ行くように、と言われた。北京大の構内には未名湖という大きな湖がある。中文系の事務室は湖の北側に、総合図書館と歴史系図書室は湖の南側にあって、かなり離れている。湖畔をぐるりと回って歴史系図書室へ行くと、「貴方は歴史系所属ではないので」と断られた。再び中文系へ行くと今度は「もう一回、総合図書館へ行ってみたら？」と言う。たらい回しである。その日は湖畔を何度往復してもどこも首を縦に振ってくれなかった。困り果てて受け入れ教授に泣きつき、紹介状を書いてもらった。それですんなり古籍を閲覧できた。たらい回しには辟易したが、他人である“舒紅”の入館証を持参するよりも、首師大図書館の方が余程まともな手続だと思った。

それにしても謎のままである。いったい北京大の図書館には何種類の“舒紅”の入館証があったのだろう。そしてなぜ図書館員たちは、“使用は本人限り”と書いてある他人の入館証を渡すことに、何の疑問も抱かないのだろう。慣習は時に思考を止めてしまう。他山之石としよう。